



act

art,
culture,
tradition

27

January 2018

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第27号

記憶と風景が交錯する

彫刻家 国松希根太の創作

彫刻家 国松希根太

地平線、水平線、山の輪郭線といった自然の境界を題材に、人の記憶と風景との交錯を主題とした作品を制作する彫刻家の国松希根太さん。2016年からは造園家でアーティストの小助川裕康さんとの共同制作も試み、2月に教文で開催されるダンス公演で、初となる舞台美術を手がける。自身の感覚に耳を澄ます創作と、他者とのコラボレーション。飛生と札幌という2拠点での制作。異なるプロセスや場所を行き来するアーティストの「現在」。

Photo : Hiroo Takatsu [STUDIO TAKE 2]



TIMESCAPE



板に油絵具とアクリル絵具／鉄 120×240cm 作家蔵



板にアクリル絵具と油絵具／鉄 120×240cm 作家蔵



板にアクリル絵具／鉄 120×240cm 作家蔵

国松さんの代表的なシリーズ〈HORIZON〉から発展した新シリーズ。〈TIMESCAPE〉とは「TIME=時」と「SCAPE=風景」を組み合わせた造語。制作のきっかけは、ある夜に何人かで白老の海岸を訪れたときのこと。

「辺り一面が満月の光に照らされて明るい中、大きな岩の前を人が横切ったときに、人と岩が一体化したような錯覚を覚えたんです。その感覚を作品にできないかと思って作ったのが始まり」。

時間、あるいはそのときの心境によって見え方が変わる風景。「時」の経過を封じ込めた一枚一枚の、間(あわい)に立ち上がるもの。それらが観る者を魅了する。

2002年から飛生アートコミュニティ
(白老の飛生地区に1986年に設立された共同アトリエ)を
拠点に制作を続けてきた国松さん。
2003年に木彫と出会い、表現方法を貪欲に試す時期を経て、
代表的な「HORIZON」「MOUNTAIN」シリーズが誕生。
近年は新シリーズも加わり、ますます多くの人を魅了する作品を
生み出し続ける彼に、お話を伺いました。

記憶と風景が交錯する

INTERVIEW

風景と向き合った時に生まれる感覚を、
作品に昇華していく国松さん。
その制作の背景にあるものは?

自然の造形と自身の造形との バランスをどう取るか。

2002年から飛生で制作を始めて、転機となったのは2009年です。ちょうど自分が暮らす土地への興味が出始めてきた頃で、いろいろな場所に行っては水平線などの写真を撮り始めて。その中から生まれたのが「HORIZON」の1作目となる《竹浦海岸》でした。それまで徹底的に細部まで作り込んでいたのだけど、あえて途中っぽさを残すことで、見た人が自身の記憶と重ね合わせる余白が生まれるんだという気づきがあった作品です。同時期に飛生から見えるホロホロ山にも登ったりして、それは立体の「MOUNTAIN」シリーズにつながっていきました。

今は札幌と飛生の両方で制作しています。札幌だと目にするのは人工物が圧倒的に多く、飛生だとほとんどが自然のもの。都会では「HORIZON」の地平線や水平線のような風景を、普段の生活の中でほとんど見ることはないですよ。でも、コンクリートのビルの一部屋に「HORIZON」があることで、その空間に広さや温かみが生まれるかもしれない。そういう役割が、自身の作品にあるのではと思っています。飛生と札幌を来しているからこそ、飛生で目にする風景をどのように人に伝えるかということについて、より意識的になるのかもしれない。

また、同じシリーズでも、制作手法は少しずつ変化しています。例えば「HORIZON」の場合、

以前は削る作業が8割を占め、最終形に向かってどんどんミニマムにしていく感覚がありました。でも、最近の制作では最後にスプレーで彩色するなど、さらに色を足すということもしています。直線で描いていた水平線をぼかして残像のような雰囲気したり、小学校の頃に歩いていた場所を散歩した時に体験した記憶のフラッシュバックや、白老の草原で目にした人の営みの痕跡など、自然の中の境界線とは違うモチーフを「HORIZON」に落とし込むこともしています。

2016年には、「WORMHOLE」という立体作品の新シリーズも制作しました。これは、いつも材料を調達している白老の木材屋さんで、中が腐って空洞になった木を見つけたことがきっかけです。本来なら潰して紙の原料にしてしまうような木なのだけど、トンネル状の中にアンプル(※)のような「この世とあの世との境界」を表現できるのではないかと。シリーズが増えたことで、見つけた素材からどうアウトプットするかという点に広がりが出て、さらに面白くなってきた感じはありますね。どのシリーズでも、最終的に自然の造形と自身の造形とのバランスをどう取るか。そこはとてども大事にしています。

※アンプル:海岸や河岸に見られる洞穴のことで、「あの世への入口」などと訳されるアイヌの伝承地。



HORIZON 2017
板にアクリル絵具と木炭/鉄 90×240cm
作家蔵 撮影:瀧原界



ALPS 2015
木(カツラ)にアクリル絵具
46×30×30cm
Maison Louis Carré蔵
撮影:瀧原界



WORMHOLE 2017
木(シナノキ) 70×210×80cm
作家蔵 撮影:瀧原界

PROFILE 国松 希根太

1977年、札幌市生まれ。多摩美術大学美術学部彫刻科を卒業後、2002年より白老町にある飛生アートコミュニティを拠点に制作活動を行なう。主に個展、グループ展などで作品を発表し、スパイラルガーデン(東京)での個展「material」や、上野の森美術館(東京)でのグループ展「VOCA展2017 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」など、国内外で発表活動を行っている。また、アヨロラボラトリーの活動としてアヨロと呼ばれる地域を中心に土地のフィールドワークを続ける。飛生アートコミュニティ代表。

act
art, culture, tradition
27

大きな立体は飛生で、平面は札幌で。

自然の造形の中に風景を立ち上げる
国松さんの制作に欠かせない3つの手作業。

塗

板材に残った模様からイメージを思い浮かべるところから制作がスタート。置き方で木目も変わるので、向きを変えていろいろ試します。その後、下書きをして、最初の色をつけていきます。最近下書きに使用しているコンテは、水でのぼしてぼかすことで残像のようなイメージに。



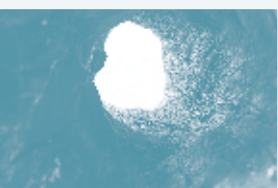
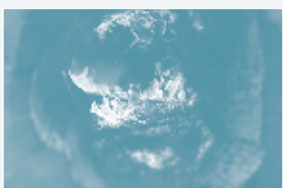
削

平面作品では、一度塗ったものを紙やすりで削ぎ取る作業を重ねます。削っては離れたところから全体を眺め、バランスを見ながら続けます。再び現れる下地の木目などを活かしながら、繊細な作業を重ね、少しずつ風景が立ち上がっていきます。立体作品の場合は、大まかな形を思い描きながら集中して彫り、最後の方に客観的に眺めるという違いがあるそうです。



焼

洞窟のイメージを表現した「WORMHOLE」では、燃やす工程も。炭ならではのマットな黒さで、間のような暗さと奥行きを表現。「こういった作業は飛生じゃないとできません」と国松さん。他に、バーナーで焦がすといった表現手法を取り入れた平面作品もあり。



飛生の森から始まった共同プロジェクト

飛生、白老に続く

コラボレーション作品は舞台美術!

「森の神話」を表現した作品として、再生した飛生の森。そこからスタートした国松さんと小助川裕康さんとの共同制作第三弾が、2月に教文小ホールにお目見え!

国松さんが代表を務める飛生アートコミュニティでは、2011年から共同アトリエとして使用している校舎を一般開放して8日間にわたって開催する「飛生芸術祭」と、校舎裏に広がる元学校林を再生させる「飛生の森づくりプロジェクト」を実施。飛生の森に「黒い鳥が見守る森と、そこに共存する人間の物語」の世界を創作すべく、一般の参加者やアーティストとともに物語に登場する大道具を制作。2016年には、国松さんと造園家でアーティストの小助川裕康さんによる共同制作として、高さ10mほどの木に黒い鳥を迎える巣(TUPIU NEST)を設置した。

小助川さんとの共同制作は、その後アイヌ民族博物館で展示した《海の宝舟》にも発展。この作品をダンサーで振付家の砂連尾理さんが目にしたことから、2月のダンス公演で舞台美術を制作することに。「舞台にただの造形物として作品があるのではなく、ダンサーさんがそれをどう活用するのかということも踏まえて設計することは、自分たちにとって初めての挑戦で面白さを感じます」と国松さん。演出家にインスピレーションを与えた《海の宝舟》が、ダンスとどのように絡み合うのか、お楽しみに!

「TUPIU NEST」

飛生の語源は「TUPIU(トピウ)」というアイヌ語で、「ネマガリダケ(トツ)の多い(ウシ)所(イ)」とされているが、その他に「黒い鳥の名」という説も。「森の神話の物語」に欠かせない黒い鳥の存在をお客さんに感じてもらうと、2013年に黒い羽を木の上に設置。セットで考えていた「巣」の設置も2016年に実現した。

「海の宝舟」

アンプルの前の海からの漂着物の清掃も兼ねて、子供たちに気になったものを集めてもらう「宝探しワークショップ」を実施。国松さんと小助川さんで流木を集めて舟の形に組み上げ、子供たちの集めた宝物を中に詰めた。舟はアイヌ民族博物館に面する凍った湖の上に設置された後、現在は飛生の森に展示されている。



画像提供:アイヌ民族博物館

出品情報 | 日本最大級の国際的なアートフェアに、「t.gallery」(東京)から出品!

アートフェア東京2018

[日 時] 2018年3月9日(金)~3月11日(日)
※最終入場は各日終了30分前

[会 場] 東京国際フォーラム・ホールE (東京都千代田区丸の内3-5-1)

[料 金] 前売り券 / 1DAYパスポート 3,000円(税込)
当日券 / 1DAYパスポート 3,500円(税込)

※小学生以下は、大人同伴の場合に限り入場無料



アートフェア東京2017の会場風景

【お問い合わせ】一般社団法人 アート東京 TEL:050-3187-5050

<https://artfairtokyo.com/>